

ロックの力能概念について (I)

後 藤 愛 司

On the Concept of “Power” in John Locke’s 《An Essay concerning Human Understanding》(I)

Aiji Goto

1 Locke の力能概念の問題性

A) Locke の『人間知性論』には、二つの矛盾する側面が存在している。それは、一般に、彼の経験論的側面と合理論的側面と呼ばれるものである。彼は、観念の感覚論的基盤からの発生を説きながら、判断の妥当性の問題をめぐって、合理論的な解釈をとっているように見えるからである。この矛盾をめぐって、Locke の哲学は、様々に解釈されているのであるが、私は、彼の叙述の順序からいっても、『知性論』の構成からいっても、観念の発生論的見地、すなわち、感覚論から真の知識へという方向が当初の彼の意図であったと考えている。

したがって、以上にのべた矛盾を当然最初から念頭におかなければ Locke の全体像の解明は不可能であることを重々知りながらも、あえて発生論的な場面に身をおいて、彼の観念の構成の諸段階における、いくつかの問題を解明したいと考える。

B) その場合、前論文⁽¹⁾において述べたように、単純観念から複雑観念への道は、Locke においては二つのプランがある。一つは、第三版までの叙述の構成にみられる分類法 (I) であり、もう一つ

I

単純観念	}	1. 一つの感官からくるもの
		2. 多くの感官からくるもの
		3. 内省からくるもの
		4. 感覚と内省からくるもの
複雑観念	様相	単純様相
		複雑様相
	実体	物 体
		精 神
		神
	関係	因果関係
同一性と差異性		
時間的および空間的規定 道徳関係その他		

は、第2巻12章1節において、第四版で付け加えられた分類法 (II) である。

I は Locke の観念学の全体的枠組であり、II は、観念の内的な発展の姿をあらわしている。

このIIの力能 (Power) という言葉に注意したい。心は、単純観念から複雑観念あるいは一般観念を構成するにあたって、力能を働かせている。つまり、力能は観念の構成における原動力であるとされているのである。

しかるに、I の分類の中では、この力能という観念は単純観念の一つであり、第2巻7章におい

II

心が単純観念の上にその力能を発動させる働きは主として次の三つである。

(The Acts of the Mind wherein it exerts its Power over its simple Ideas are chiefly these three.)

- ① 単純観念を複雑観念に構成すること。
- ② 観念間の関係をとらえること。
- ③ 抽象によって一般観念を作りあげること。

て述べられているように、感覚と内省のいずれかからくる単純観念、つまり「快、苦、力能、存在、単一」のうちの一つに数えられている。

つまり、一方では、単純観念の一つにすぎないものが、ある場合には、観念学形成の原動力となるような観念にすり変っているのである。この力能の観念を論じた章としては、第2巻21章という

長大な論述がある。ところが、この章においては、主に人間の意志と自由をめぐる倫理的考察が主なる部分をしめ、力能観念の先にのべた問題性は、あまり詳しく考察されていない。また、これまでの一般の解釈においては、ここで展開される自由と意志をめぐる議論は、不明瞭であるとされているのである⁽²⁾。

私は前論文⁽³⁾において、Lockeの空間論を分析し、その中で、彼には懐疑論的な方法があったのではないかという点に注目した。この見地を導入することで、彼の力能論のはらんでいた問題を、明らかにしてみたいと思う。そして、Lockeの直面した矛盾が、実は17世紀形而上学の解体と18世紀フランス唯物論の成立への道を示唆していたことを示したいと思う。

2 物体における力能

A) Lockeは彼の考察を常に観念の問題に限定しようとする。観念とは、心に、直接対象としてあらわれるものである。しかし、観念は、『知性論』第1巻の分析が示すように、我々の心に生得ではない。したがって、何物かが、我々の心に観念をうむのである。この心に観念を生む力能を、彼は主体の性質(quality)と呼んでいる。

Whatsoever the Mind perceives in it self, or is the immediate object of Perception, Thought, or Understanding, that I call Idea; and the Power to produce any Idea in our mind, I call Quality of the Subject wherein that power is.⁽⁴⁾

彼はこの主体(Subject)そのものを直接語らず、その性質(Quality)において、主体を代表させようとするわけである。こうして、Lockeは、観念学の内部で物体の問題をあつかうという矛盾を一応解消した上で、物体の問題を性質という局面におきかえる。このように、彼が物体に関わる場合は、大変周到な前程のたて方をしている。

物体の問題は、本来ならば、彼の所謂『物性的考察』(Physical consideration)と関わらざるをえないのが通例である。そこで、自己の設定した観念学の枠組の中で物体を論じようとする場合、物体はこのように性質という観点でしかとらえられないのである。

この場合、性質は観念を生むものであり、その点で、事物と混同される場合がある。性質は事物と厳密に区別できない概念なのである。

……:which Ideas, if I speak of sometimes, as in the things themselves, I would be understood to mean those Qualities in the Objects which produce them in us.⁽⁵⁾

この点において、彼は、最初の前程としては、物性的考察から身を引く立場をとったにもかかわらず、後にのべるように、性質を分析する際には、物性的考察にかかわってしまうのである。

B) 物体の性質を論ずるにあたって、彼は周知のように一次性質 (primary quality)、二次性質 (secondary quality) という分類を行う。

一次性質とは、その事物の「かさ、形、数、位置、運動もしくは静止」などを意味し、物体がどんな状態であれ、その物体から全く分離できないような性質である。この一次性質の存在を論証するにあたって、彼は分割の比喩を用いる。

Take a grain of Wheat, divide it into two parts, each part has still Solidity, Extension, Figure, and Mobility; divide it again, and it retains still the same qualities; and so divide it on, till the parts become insensible, they must retain still each of them all those qualities. For division can never take away either Solidity, Extension, Figure, or Mobility from any Body,⁽⁶⁾.....

この説明は一次性質の存在証明となりうるであろうか。私は Locke の空間概念を分析した時、彼が懐疑論的方法を用いている点を論じたことがある。もし彼が懐疑論的方法に忠実であれば、こういう説明はなりたない。分割の論理は、懐疑論においては、全く逆に用いられるからである。Sextus Empiricus の『ピュロン哲学の概要』には次のようにのべられている。

Par exemple, les raclures de corne de chèvre apparaissent blanches, vues seules, à l'état simple, mais lorsqu'elles composent la substance de la corne, on les aperçoit noires. La limaille d'argent apparaît noire, prise à part, mais dans l'ensemble elle paraît blanche à nos yeux. (.....) Nous pourrions donc là aussi dire ce qu'est la fine parcelle de corne et ce qu'est la corne composée de bien des parcelles fines, ce qu'est la lamelle d'argent et ce qu'est l'argent composé de beaucoup de ces lamelles, (.....), nous pourrions établir une relation sans toutefois connaître la nature même des objets à cause de la contrariété des représentations dues aux compositions.⁽⁷⁾

このように、懐疑主義的立場に立てば、対象は、その『量』と『構成のされ方』によって、様々な形で人間に感取されることになり、結局、その対象物の本性について人間は真の認識に至ることなく、判断保留の地点に留まるべきだということになる。もっとも、この引用文のあつかっている諸例は二次性質にのみかかわるのであって、一次性質は別だという意見もあろう。しかし、Locke が何度もくりかえして言うように、人間のもつ観念が、感覚と内省からくるという立場に固執するかぎり、物質の観念は感覚をとおしてあらわれざるをえない。感覚をとおして認識されるという点では、一次性質と二次性質の間に区別はない。懐疑論者は、一次性質と二次性質を分ける必要を認めないのである。

ところが Locke はこの一次性質を彼の懐疑の網の目からもらし、それに特権的な地位を与えている。彼の一次性質のとらえ方は一種の模写説であって、感覚の介在をほとんど排除してしまうのである。

From whence I think it is easie to draw this Observation, That the Ideas of primary Qualities of Bodies, are Resemblances of them, and their Patterns do really exist in the Bodies

themselves;⁽⁸⁾

したがって、外的事物の性質は、観念の内容と混同されるという結果をまねいてしまう。

先まわりしていえば、英国経験論の発展はこのような曖昧な立場をゆるさず、ついには、彼の一次性質の持つ特権的な地位を解消させるに至るのである。

しかし Locke が懐疑主義的議論を通例の方向とは全く逆の方向にまげて、感覚論の限界性を突破し、物質のもつ根元性を一次性質という形ですくい出している点は、後にのべるような力能のとらえ方と関連して、興味深いものがある。

C) 次に二次性質をみてみよう。二次性質とは「色、音、味、etc.」の可感的性質のことをいう。Locke はこの二次性質を一次性質から分離、独立させて考察しなければならない所以を第2巻8章16節から20節にかけて、多様な例をあげながら論じている。例えば、雪の白さ、冷たさの観念、mannaの観念、斑岩の赤と白の色 etc. をつかって、物理的過程、諸分子の運動、寸法、形 etc. と人間に感取される性質との間の区別が必要な所以を説くのである。この部分の論述の仕方は Sextus Empiricus に見られる懐疑主義的方法とほとんど一致している。したがって、そこから出てくる結論としては、意識現象論的な、いつもの彼の主張のくりかえしにすぎない。しかし、その意識現象として二次性質が現われる根拠をとくにあたっては、彼は、あれほど排除したはずの物性的な考察に深入りしてしまうのである。彼は次のような言訳をすることになる。

I have in what just goes before, been engaged in Physical Enquiries a little farther than, perhaps, I intended. But it being necessary, to make Nature of Sensation a little understood, and to make the difference between the Qualities in Bodies, and the Ideas produced by them in the Mind, to be distinctly conceived, without which it were impossible to discourse intelligibly of them; I hope, I shall be pardoned this little Excursion into Natural Philosophy⁽⁹⁾.....

つまり、二次性質というものが、「全く物体に類似しない⁽¹⁰⁾」で「二次的に仮託された(帰属した)性質⁽¹¹⁾」であることを論証するためには、反面において、一次性質は「物体と類似し⁽¹²⁾」, 「物体に実在する⁽¹³⁾」性質であることを強調せざるをえない。しかし、これを論証する方法は、内観的な観念学の枠組をこえて物性的考察に関わらざるをえなくなるのである。この時、一次性質という境位でとらえられた物体の根元性と優位性が強調されることになる。

しかしながら、一次性質も二次性質も、どちらも我々の心に感取される性質であることにかわりはない。この両者を一体のものとしてつなぐ概念は何であろうか。それが力能の概念である。

D) Locke は第2巻8章23節において物体の性質を三種に分けている。

- ① First, The Bulk, Figure, Number, Situation, and Motion, or Rest of their (Bodies) solid Parts; those are in them (Bodies), whether we perceive them or no:..... These I call primary Qualities.
- ② Secondly, The power that is in any Body, by Reason of its insensible primary Qualities, to operate after a peculiar manner on any of our Senses, and thereby produce in us the different Ideas of several Colours, Sounds, Smells, Tasts, etc. These are usually called

sensible Qualities.

- ③ Thirdly, The Power that is in any Body, by Reason of the particular Constitution of its primary Qualities, to make such a change in the Bulk, Figure, Texture, and Motion of another Body, as to make it operate on our Senses, differently from what it did before. …… These are usually called Powers.⁽¹⁴⁾

①は一次性質であり②は二次性質である。そして②③は①の変容の結果である。この②③は共に力能であって、そのかぎりでは、区別する必要はない。ところが②は一次性質の作用であることが直接的に感取できないので、「色や音などの観念が対象自身に存在するある事物の類似物であると想像⁽¹⁵⁾」してしまうのである。そのために、二次性質は単なる力能と区別されるにすぎないのである。つまり、②③は、ともに一次性質の変容の結果である力能なのである。

このように見ると、Lockeにおいては、物体を性質という局面でとらえるかぎり、二つの側面がかびあがってくる。根本的な規定性である一次性質とその力能の二つである。先にのべたように、一次性質は物体そのものの類似物であり、物性的考察の対象にしかないものである。しかも、物体がどのような変化をおこそうと変化しない性質のことである。それに対して、力能は単純観念の変化そのものを意味する。

The Mind, being every day informed, by the Senses, of the alteration of those simple Ideas, ……considers in one thing the possibility of having any of its simple Ideas changed, and in another the possibility of making that change; and so comes by that Idea which we call Power.⁽¹⁶⁾

このように性質の観点から力能を見る時、力能とは、変化そのものを把握する時に出てくる概念である。しかし、実は、力能は単なる変化にとどまらない。

たとえば、一次性質はそれ自身変化しないものである。しかし、「我々の心に何かの観念を産む力能を、この力能が存する主体の性質と呼ぶ⁽¹⁷⁾」という定義がある以上、一次性質といえども性質なのだから、これも力能である。一次性質が観念として把握された時、それは力能の結果なのである。また二次性質はこの一次性質の変容の結果としての力能である。したがって、この力能において、一次性質は二次性質と結びつけられる。

この場合、力能は観念そのものを成立させる原動力なのであって、それ自身は単なる観念ではない。このことは、第一章B) においてのべた、単純観念から複雑観念あるいは一般観念を構成する際に働く力能の場合と同様、力能のもつ根元性の証拠である。そして基本的には、一次性質をになう主体、つまり物体に力能を認めることになる。

しかし、力能論をこの方向にすすめることは、Locke の場合はゆるぎされないことである。なぜなら、彼の方法は観念の原因を求めないからである。

These the Understanding, in its view of them (Ideas) , considers all as distinct positive Ideas, without taking notice of the Causes that produce them: which is an enquiry not belonging to the Ideas, as it is in the Understading: but to the nature of the things existing without us.

There are two very different things, and carefully to be distinguished,⁽¹⁸⁾

観念の原因を求めることは、物性的考察に深入りすることになり、彼本来の方法からは逸脱してしまふ。しかし、逸脱した場合にのみ、その力能をもつ主体の能動性が論じられる場が開けるのである。

とはいっても Locke は、物性的考察には深入りせず力能の問題をとりあげる道を見出している。それは力能を単純観念の一つに数えるという道である。この問題は実体の観念を構成する際にとりあげられている。

E) 私は、前論文において様相 (modes) を分析する際、実体の観念についてふれたので、ここでは結論だけ述べておく。

Locke の場合、実体は、まとまった単純観念群を成立せしめるために、支えるものとして、「単に想定されたもの」にすぎず、様相に対して priority を持たない。実体といえども単純観念の集合として見る他ないのである。この実体の複雑観念を構成する要素として、つまり、単純観念のうちに「力能」は数えられることになる。

このことを第2巻23章から引用してみよう。まず、あらゆる種類の実体についての観念を彼は次の三点に要約する。

- ① First, That all our Ideas of the several sorts of Substances, are nothing but Collections of simple Ideas,……
- ② Secondly, That all the simple Ideas, that thus united in one common Substratum make up our complex Ideas of the several sorts of Substances, are no other but such, as we have received from Sensation or Reflection……
- ③ Thirdly, That most of simple Ideas, that make up our complex Ideas of Substances, when truly considered, are only Powers, however we are apt to take them for positive Qualities; ……⁽¹⁹⁾

このように実体は単純観念から構成され、その単純観念の大多数が力能であるとされる。③において実定的性質 (positive Qualities) とは、本来は一次性質のことである。しかし、一次性質は変化しないものであるから、それぞれの複雑観念の持つ概念の多様性にみあった一次性質を数えあげることが不可能である。また、一次性質をになう主体は、人間の認識能力の限界の外にあり、本来、我々には知られえぬものである。これについて論ずる時、またしても物性的考察に踏みこむことになるからである。したがって実定的性質を認めるとすれば、出きるだけその数を少なく限定しなければならない。そうすれば、それと反比例的に、力能の観念は拡大されることになる。

このようにして、実体という複雑観念の主要要素として、力能は拡大され、同時に、単純観念の中に位置づけられたのである。

F) 次に力能の分析にうつろう。彼は力能を二つに分ける。能動的力能 (active power) と受動的力能 (passive power) である。前者は変化させるもの、後者は変化をうけるものである⁽²⁰⁾。Locke がこのように力能を分割する理由は、当時の力学において発見された法則性を認識論に応用したからである。つまり、Robert Boyle の影響下でおこなわれた彼の自然学研究が、このような考え方を生み

だしたのである。(つけ加えていえば、彼の一次性質、二次性質の区分も Boyle の影響であろう。) Boyle 流の微粒子の運動と衝突による自然現象の説明が、つまり力学における作用、反作用の概念が、力能概念に適用されたと考えればよい。

次に、物体における力能を考えてみよう。この物体というのは、一次性質とは異なる。一次性質とは、二次性質に対していわれる観念であって、どちらも物体において感取される単純観念である。(二次性質が力能であることは先にのべた。) 前にのべたことだが、性質が観念として感取されるのは、その性質をになう主体の力能による。だから結局、一次、二次性質は力能にすぎないのである。したがって、ここで物体というのは性質をになう主体のことである。

この場合、Locke は物体を精神に対立する概念としてつかっている。彼は、Descartes から学んだ、物体と精神の二元論を前程にして、物体を論ずるからである。

物体における力能は次のように定義づけられる。

The primary Ideas we have peculiar to Body, as contradistinguished to Spirit, are the cohesion of solid, and consequently separable parts, and a power of communicating Motion by impulse. These, I think, are the original Ideas proper and peculiar to Body:⁽²¹⁾

物体が相互にある関係をもつ場合、そこに見られるのは衝突であり、衝撃 (impulse) によって他の物体に運動を伝達する。この場合、Locke は、物体は他からうけとった運動を別の物体に伝達し、転移するだけであって能動性を持たないと考えている。これは、運動の始まりの観念が物体からは与えられないところからくる。

Neither have we from Body any Idea of the beginning of Motion. A Body at rest affords us no Idea of any active Power to move, and when it is set in motion it self, that Motion is rather a Passion, than an Action in it.⁽²²⁾

つまり、物体は受動的力能だけをもち、能動的力能はもたないということである。これはやはり、先にのべた Descartes 的二元論からくると見なければならぬ。物質と精神における能動、受動を Locke は次のようにとらえているからである。

Pure Spirit, viz. God, is only active; pure Matter is only passive; those Beings that are both active and passive we may judge to partake of both.⁽²³⁾

物体を本来的な在り方にまで還元すれば、純粹物質となり、それは完全な受動性であるという考えである。それに対して、精神は、その完全体としての神までさかのぼれば、能動性そのものとなる。

しかし、人間の住む世界は純粹精神の世界でも純粹物質の世界でもない。この中間的世界においては、受動的なものと能動的なものが混在している。我々が力能を見るのもこの世界の中においてである。そして、この世界の中では、真の意味の力能、つまり能動的力能は精神性の中に、つまり我々の心の作用についての内省から得られるのみであって、受動的なものである物体からは得られないと、Locke は見るのである。

G) これに対して、精神は能動性に常にあずかり、物体に対してすら能動性を働かすことができる。

: and our Idea of our Soul, as an immaterial Spirit, is of a Substance that thinks, and has a power of exciting Motion in Body, by Will, or Thought.⁽²⁴⁾

したがって、思考し、意志あるいは思惟によって物体に運動を喚起できる実体としての精神の中に、真の意味での能動的力能は見られることになる。(彼の精神における力能についての考え方は、意志と自由の問題を中心として、第2巻21章でくわしく論じられているが、この問題の分析は別稿にゆずる。)

ここでは思惟することが精神の本質であるとする観点がみられるので、蛇足ながら、物体と思惟の関係について Locke の考えをのべておこう。

Locke は力能について我々が観念を持つことができるのは、次の二つの活動からにすぎないと考えている。

For all Power relating to Action, and there being but two sorts of Action, whereof we have any Idea, viz. Thinking and Motion……⁽²⁵⁾

運動 (Motion) の場合は、前述したとおりである。思考について、彼は「物体は思考の観念を全く与えない⁽²⁶⁾」として、物体から思考を切りはなしている。思考の観念は、内省をとおしてのみ与えられるのである。

3 物体における能動性

A) これまでの分析を約言すれば、物体における力能は、受動的であることと、思惟に関与しない(物質は思惟できない)ことの二つの特徴をもっている。

しかし、現実の物体の世界を見ながら、よく考えてみよう。単に受動的である物質の世界が、何故にかくも変化し運動し多様であるのか。思惟できない物質の世界が、何故にかくも調和し、精緻なのか。こうした問いに Locke はどう答えるのであろうか。こうした問題に対する彼の答は、ほとんどの場合、只一つである。つまり、神の意志である、創造主の智慧であるというのである。

しかしながら、上述の問題がいつも神をもち出すことで真の意味で解決するとは思われない。Locke の中にもそうした疑いはおこったようである。彼も、物質に能動性を認めることの可能性を考えたことがあるからである。たとえば、次のような叙述である。

But since active Powers make so great a part of our complex Ideas of natural Substances, (……) and I mention them as such, according to common apprehension; yet they being not, perhaps, so truly active Powers …… I judge it not amiss, by this intimation, to direct our Minds to the consideration of GOD and Spirits, for the clearest Idea of active Power.⁽²⁷⁾

自然的実体に能動性があることを彼は認めている。ただそれは真の意味での能動的な力能ではないので、精神の中に探究をすすめた方がいいというのである。

あるいはまた、次のような叙述もある。

But if, from the Impulse Bodies are observed to make one upon another, any one thinks he has a clear Idea of Power, it serves as well to my purpose,……⁽²⁸⁾

ここでも、Locke は、物体から力能概念をえる者があるかもしれないという可能性を認めている。

ただ、彼は、その道をとらなかつただけである。そうすることは、彼の方法「事象記述の平明な方法 (historical, plain method)」の限界を超えることである。つまり、その道は、力能の起源の問題とかわり、物性的考察に踏みこまざるをえないからである。

また、物質の思考可能性については、たとえば次のような叙述もある。

It being, in respect of our Notions, not much more remote from our Comprehension to conceive, that GOD can, if he pleases, Superadd to Matter a Faculty of Thinking, than that he should superadd to it another Substance, with a Faculty of Thinking;⁽²⁹⁾

このような物体が思考するという構想を、Locke は、これ以上発展させてはいない。物質の能動性を前程とした理論は、存在論的局面で展開されなければならないので、物性的考察にかかわり、同時に、彼の方法を根本的なところで、解体してしまう危険があったからである。我々は、Locke が彼の方法の範囲を超えて、可能性の問題として、能動的物質を認めていたことを、ここに確認しておこう。

B) ここで最後に、Locke の物体における力能論全体を総括しておこう。

Locke は物質における能動的力能という問題を、力能を複雑観念に対する単純観念とみることによって、すり抜けて通ってしまった。しかし、解決したのではなかった。基本的な前提にたち帰って考えてみれば、一次性質を二次性質から分けることで、物質の知覚からの独立性、つまり物質の根元性をうちたてたことが問題であった。この時、彼は、懐疑論的方法を貫徹しなかったのである。この一次性質こそは、Locke が彼の意識現象論的立場を一貫してつらぬきとおすならば、最初から措定してはならない概念だったのである。だから、その後の英国経験論の流れは、一次性質の解体をめざしてすすむことにした。

また、たとえ、この一次、二次性質の区分を認めたとしても、一次性質をになう主体としての物体から、能動性を完全に排除できない。可能性が残されているからである。

物質に、能動的力能を認める道は、誤解をおそれず言えば、唯物論への道である。この道が、まがりなりにも定式化されるのは、18世紀の初頭、理神論が唯物論へ転換する時期である。彼は、可能性として、唯物論への道を開いていたのである。しかし、「事象記述の平明な方法」は「物性的考察」を排除するので、この道はついに開かれることなく、終わった。

注

- (1) 『ロックの空間概念について』 p.23, 聖徳学園女子短期大学紀要, 第7集 (1981)
- (2) 九鬼周造 『西洋近世哲学史稿』 p.230
- (3) 注1に同じ。
- (4) Johe Locke《An Essay concerning Human Understanding》edited dy Peter H. Nidditch, Oxford,1975 II, 8, §8, p.134
- (5) ibid. II, 8, §8, p.134
- (6) ibid. II, 8, §9, p.135
- (7) Sextus Empiricus 《OEvres choisies》 traduites par Jean Grenier et Geneviève Goron, Aubier, p.184 (chapitre XIV Des dix modes, 129~132)
- (8) ibid. II, 8, §15, p.137

- (9) *ibid.* II, 8, §22, p.140
- (10) *ibid.* II, 8, §15, p.137
- (11) *ibid.* II, 8, §22, p.140
- (12) *ibid.* II, 8, §15, p.137
- (13) *ibid.* II, 8, §22, p.140
- (14) *ibid.* II, 8, §23, p.140~141
- (15) *ibid.* II, 8, §25, p.142
- (16) *ibid.* II, 21, §1, p.233
- (17) 注(4)に同じ。
- (18) *ibid.* II, 8, §2, p.132~133
- (19) *ibid.* II, 23, §37, p.316~317
- (20) *ibid.* II, 21, §2, p.234
- (21) *ibid.* II, 23, §17, p.306
- (22) *ibid.* II, 21, §4, p.235
- (23) *ibid.* II, 23, §28, p.312
- (24) *ibid.* II, 23, §22, p.307~308
- (25) *ibid.* II, 21, §4, p.235
- (26) *ibid.* II, 21, §4, p.235
- (27) *ibid.* II, 21, §2, p.234
- (28) *ibid.* II, 21, §4, p.235~236
- (29) *ibid.* IV, 3, §6, p.541

(1981. 10. 12. 受理)